

日本古来の「赤」や「紫」

岡谷蚕糸博物館で染織三人展



岡谷蚕糸博物館で開幕した染織三人展で日本茜と紫根の魅力
を語る（左から）中谷さん、高橋さん、服部さん、寺田さん

岡谷市郷田の岡谷蚕糸博物館で18日、企画展「日本茜・スエの中谷佐子さん（東京都）が今展を企画した。高橋さんは江戸古染の染色作家として活動。寺田さんは京絞り、服部さんは爪掻本綴織の工房を主宰し、着物や反物を制作している。初日はオープンニングパーティークを進行、3人が日本茜・紫根にかける思いや制作の苦労話を披露。国旗・日本まで。

日本茜は山野に自生するアカネ科のつる性多年草で、紫根は植物「ムサシ」の根。ともに奈良・平安時代から染料として用いられ、古来では位の高い人の衣裳のみに許されてきた。ただ、栽培する人が減り、化学染料の普及から国産の日本茜・紫根を使用する染色家が減少する中で、情報交換を行っていた3人の活

「助六」が額に巻いている染色の由来などを説明した。中谷さんは「日本人の色に対する感性は文化として思い入れを忘れられようとしている。日本茜や紫根の素晴らしさを伝え、染色の伝統技能と豊業を結び付けたい」と今展の意義を強調していた。

開館時間は午前9時～午後5時。入館料は一般510円、中高生310円、小学生160円。諏訪地域の小中学生と岡谷市在住・通学の高校生は無料。休館日は毎週水曜日と祝日の翌日。期間中はさまざまなワークショップが行われる間、含むせは同館（電話0266・233489）へ。（後藤八十晴）